魅せる足

ボールを蹴り出す太ももの何とたくましいこと。サッカーU-20日本女子代表「ヤングなでしこ」の田中陽子選手(19=INAC神戸)の"注目の足"である。この右足で、いや左足でも、U-20女子W杯のグループリーグから決勝トーナメント韓国戦まで「4試合連発の5ゴール」をたたき込んだのだ。

グループAのスイス戦は驚きの2発!前半に右足で、後半には左足と左右両足でFKを決めた。韓国戦は柴田華絵選手(20=浦和)の2発の後、ダメ押しのゴールを押し込んだ。

国際大会での一大会5得点は、11年女子W杯の「なでしこジャパン」澤穂希選手(33)と並ぶ。ニューヒロインの躍動がまぶしい。

写真=小出洋平　文=山本貞夫

東京の国立競技場で8月30日

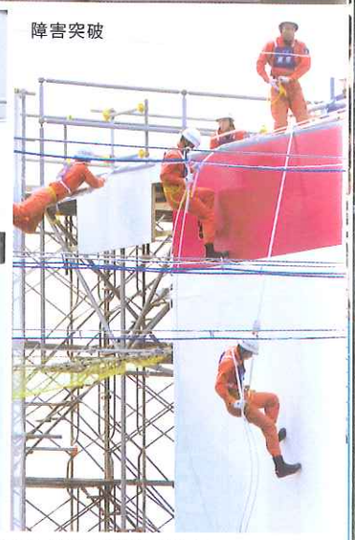
CAMERA EYE

ロープブリッジ渡過

ほふく救出

ロープ応用登はん

障害突破


障害突破

「陸上の部」では、災害現場の様々な障害に対応することを目的に、「乗り越える」「登る」「渡る」「煙の中を通過する」「降りる」などの種目で消防救助技術が競われた

9月1日は防災の日　テーマは「心をひとつに ~POWER OF JAPAN~」

命を守る消防救助技術を競い!学ぶ!

「第41回全国消防救助技術大会」東京で開催

8月7日、東京・江東区で「第41回全国消防救助技術大会」(主催 一般財団法人全国消防協会)が開催され、全国9地区支部791消防本部から選抜された救助隊員約1000人が、鍛え抜かれた消防救助技術を競い合った。

この大会は1972年から毎年開催されているもので、年々複雑多様化する災害現場に即応できるよう、高度な消防救助技術と強靭(きょうじん)な体力、精神力を養い、研さんを図ることを目的としている。競技は、はしご登はん、ロープブリッジ救出などの「陸上の部」と、溺者救助、水中検索救助などの「水上の部」に分かれ、それぞれ7種目で確実性や所要時間を競う。

大会当日は午前中から30度を超える猛暑のなか、一般見学者や消防関係者で会場は埋まり、競技がスタートするたび熱気と興奮に包まれた。

全国の消防救助隊員は、市民の生命を守る熱意と日頃鍛えた技術によって日々業務を行っている。この大会は、そうした成果を広く市民に披露する貴重な機会ともなっている。

はしご登はんで全国2位となった宮城県石巻市の渡邉晃(ひかる)消防士(28)は、「東日本大震災で全国の皆さんから頂いたご支援への恩返しという気持ちで、石巻消防の元気な姿を見せたいと思って来ました。震災では6名の仲間が殉職しましたが、今日は彼らの思いも胸に、日頃の成果をお見せすることができ良かったです」と話した。

東海、東南海、南海地震など大規模地震が危惧され、竜巻や水害で大きな被害が出るなか、消防救助隊員への期待はますます高まっている。

市民の命を守るため日々過酷な訓練を行っている消防隊員。彼らの知られざる勤務実態については本誌34~35ページをご覧ください。

「第41回全国消防救助技術大会」については http://www.ffaj-shobo.or.jp/rescue/41index.html

驚愕の〝知られざる実態〟
消防「残酷」物語

全消協の迫会長㊧と近畿幹事の仲野さん

9月1日は「防災の日」。「住民の生命と財産を守る」――消防職員の尊い志が日々の暮らしを守っている。しかし、そんな現場の思いとは裏腹の労働環境が存在するという。知られざる消防の実態をリポートする。

火災の予防から実際の消火・鎮圧活動、傷病者の搬送・救助活動など、消防職員の職務は常に危険と隣り合わせだ。だが、危うい場面は何も火災・災害など非常時の現場だけにとどまらない。一見平和な日常のなかにも潜んでいる。

「典型的なのが、松戸の事例です」。現職の50代消防職員が打ち明ける。

説明が必要だろう。

2009年、松戸市消防局の元消防士4人が、パワーハラスメントで退職を余儀なくされたとして同市を相手取り、損害賠償請求訴訟を千葉地裁松戸支部に起こした。市側は「行きすぎた行為があった」と認めて、4人に660万円の和解金を支払った。

訴状や弁論で提出された陳述書によると、4人は06年3～5月、消防局の新規採用職員を対象にした集中訓練で、1万回の腕立て伏せや、重さ5、6キロもある土嚢（どのう）を担いで1時間の持久走を命じられるなどした。ロープを登る訓練中に約20分間宙づりの状態となり、意識がもうろうとして地上に降ろされた後、コンクリート床に1時間ほど正座を命じられたうえ、足蹴（あしげ）にされたケースもあった。「ぶっ殺してやる」「代わりはいくらでもいる」「ここにはお前の未来はない」などの暴言もあったという。

「『刑事事件に置き換えた場合、暴行傷害罪で10年以下の懲役に相当する』との説明が和解協議の際に裁判長からあった。大きな社会問題となっている学校の『いじめ』となにが違うのでしょうか」（50代職員）

上意下達による、指揮命令系統が徹底した組織。言葉の暴力や、実際に拳を振るう鉄拳制裁などは〝日常茶飯事〟という。

部下のささいな行動に腹を立て、頭や顔に粘着テープを巻き付けたとして、東京消防庁は今年3月、麻布消防署に勤務する50代の消防司令補を停職4カ月の懲戒処分にしている。

消防司令補は昨年7月、署内の衣類乾燥機のふたに粘着テープが貼られ、使用できない状態だったことに腹を立て、乾燥機を管理していた20代の部下にテープを巻き付けた。節電のため使用を控えていた乾燥機だったが、使用できる雨天の日にふたにテープが貼られたままだったことに消防司令補が激高したという。

別の50代職員によれば、女性職員に対しては「女のくせに」と罵声が飛ぶこともある。結婚や出産を機に、暗に退職を促されることも少なくないという。「そんな職場が発展するわけがありません」（職員）

冒頭の50代職員は「松戸のケースは氷山の一角」とつぶやく。体力のある20、30代の消防士が訓練中に倒れることもあり、実際、死亡事例もあるという。

07年9月、埼玉県では強歩訓練中に28歳の職員が熱中症で亡くなった。09年5月には大分県で水難救助訓練中、安全管理の不備で26歳職員が溺死した。上司が刑事責任を問われたほか、県が8200万円を支払うことで遺族と和解している。10年12月には岐阜市で32歳の職員がはしご車を使った訓練中に死亡。今年7月にも岩手県花巻市で水難救助訓練中に39歳職員が死亡し、管理責任を指摘する県の中間報告が出ている。

さらに、各種感染症や有毒ガスなどの新たな〝脅威〟も存在する。アスベスト（石綿）はその一つ。消火・救急活動の際に隊員らは空気呼吸器を着用するが、鎮火後は呼吸器を外すのが一般的で、アスベストを使用した建物で火災があった場合、隊員が大気中のアスベストを吸い込む可能性があるという。

「ひっそりと死を選ぶ仲間もいる」

消防職員には団結権がない。「指揮命令系統に混乱が生じる」といった懸念などから、消防職員は警察職員とともに、地方公務員法で労働組合の結成・加入を禁じられている。このため、「職場環境の改善」などの課題には真正面から対策に乗り出しにくい現状がある。危険で過酷な職務に加え、先述したように日常業務中ですら現場の士気にかかわる状況に置かれたら――。そんな中、改善を目指す動きも出てきている。

先に挙げた松戸市の消防職員有志は08年、「市消防職員協議会」を結成している。「訴訟を起こしたい」とパワハラを受けた4人から相談を受けた際、助言を与えたのが全国消防職員協議会（全消協）である。

77年に発足した全消協は「全国の消防職員の働きやすい職場をつくる」を目標に掲げる。全消協によると、日本のように消防職員の団結権を認めていない国はごく僅かだ。韓国、タイなども少数派に属するが、2国ともに団結権と結社の自由を保障するILO（国際労働機関）87号条約を批准していない。日本は批准国のため、再三ILOから改善を勧告されてきた経緯がある。さらに、同条約を批准しているOECD（経済協力開発機構）加盟国のうち、消防に団結権がない国は日本だけだ。

ある30代職員は、ため息まじりにこう言う。

「松戸の4人は退職はしたものの、命は落としていない。同じような事例は全国で起きていて、中にはひっそりと死を選ぶ仲間もいる。表面化しない問題は少なくないのです」

消防の職場は「体育会系で、閉鎖的」と指摘するのは、全消協の迫大助会長（55）である。迫会長や複数の現職職員の話を総合すると、上意下達の傾向が強く、職務上の自由な討議の場がほとんどない。現場の悩みや意見が上層部に伝わりにくく、やる気を失ってしまう職員も少なくない。実質的に人員が減少する中で、増加する消防行政需要に十分にこたえられないという。「『大好きな消防』という仕事を続けられない。それが実情なのです」（迫会長）

全消協近畿幹事を務める仲野桂太さん（36）は「住民の視点で消防サービスを提供したい。全消協は全国の仲間と情報や意見を交換でき、大きな視野で消防のあるべき姿を理解できる。私たちの世代こそが、よりよいサービスを広く提供するために、さまざまな問題に真剣に向き合うべきでしょう」と胸を張る。発足当初は約2500人だった会員も約1万3000人まで増えた。それでもまだ全体の1割程度にとどまる最大の理由は、「加入が出世に響くと思われている」（全消協）ためという。

迫会長は「職場の問題を話し合い、改善の方策を研究する団体まで禁じている法律はない。決して違法な組織ではない」として、こう強調する。

「人の命を助ける職場なのに、自ら命を絶つ職員も多い。しかし、そんな現状を上司に訴えることはできない。単なる愚痴と受け流されないために、皆の意見を伝える必要がある。そのために全消協があるのです」

ジャーナリスト・金澤　匠

全国消防職員協議会 http://zensyokyo.jp/